『ふるえ (02/01)』

メイクを落としながら
道化は震えている
鏡に写った己が未来を知って
その姿の淋しさに
道化は震えている
逃げる事など出来ない歳

若さが羨ましかった
若さが眩しかった
むかし己にも有った輝き
できることなら
あの輝く日々に戻りたい
もっともっと人を愛したかった

老いに身体が震え
涙が後から後から
鏡に溢れ写っている
その温もりを拭いながら
今日の演技の拙さが
胸を刺してくるのに耐えた

逃げる事も出来ない歳
心の震えを忍びながら
鏡に写る淋しさを消し
指の震えを止める事も出来ず
己が顔を鏡に写し
道化はメイクを落としている

『ゆきんなか (02/02)』

雪が吹き荒ぶ日
男と女が帰らぬ世界へ
旅立っていきました

まるで見果てぬ
人生を夢見るように
男の顔も女の顔も

女と男の夢見の顔は
吹き舞う雪に青白く
夢の世界へ行ったまま

男もつらいが
女もつらい
男と女は戻らぬ旅へ

この世の事は
夢の出来事と
真の世界へ旅立って

夢の世界は雪荒び
男と女の青白顔に
雪が風に舞い散っている

『居酒屋詩情 (02/04)』

路地裏店の
居酒屋の赤提灯が
闇に揺れ
出船の汽笛が通り去る

涙落とした杯を
一つ飲んでは
風音をきき汽笛を聞く

二つ飲んでは泣いている

男もつらいが
女もつらい
逢うも別れも
人生夢の中

涙落とした杯を
三つ飲んでは夢を捨て
四つ飲んでは夢浮かべ
震える心を忍んでる

逢うも別れも
人生夢の中
路地裏店の赤提灯
闇に灯って風に揺れ

出船の汽笛も闇に消え
涙落とした杯を
ぐいっとあおって夢の中
破れ障子に風が舞う

『道化 (02/10)』

戻らぬ刻みに
涙する
帰らぬ思いに
涙を流す
胸に刺しこむ
痛みを
知りて人は
愛を得る

帰らぬ刻みに
恋い焦がれ
戻らぬ日々が
くるくる回る
雪に雨に風に
くるくる回る
懐かしさに
温もりに抱かれて

人は旅人
人生は暗幕の舞台
道化のように
舞って舞って

涙して笑いして
たった一人
たった一人
暗幕の道化舞

戻らぬ刻みに
涙して
帰らぬ思いに
舞って舞って
くるくると
人生暗幕舞台
舞って舞って
人は旅人

『阿弓流為 (02/21)』

馬をかければその右にでる者有るや
人心を操る術はその右にでる者有るや
蝦夷の人心を治めその数弐千なりか
しかしてその弐千の人身をもってして
日本の五万の軍を破り足るなり
しかしてその治める大地には
原生林の山河なりき雪深き大地なりき

五万の兵が敗走へ 追い兵することなく
日本がこの大地に攻めて来る
我々から一度足りとも仕掛けないのに
なぜ共存できぬのだ
涙を北上川に流し 死者に泣いたと言う

勝ち戦に酔う部族に
阿弓流為は激怒して諌めた
お前達は日本の物を手に触れ
死者から武具を得た
お前達はもう日本に勝てない
日本は富める国だ
もっと大軍がやがて攻めてくるだろう
お前達はもう勝てない
俺たちは戦をしたのではない
向こうが責めてきたから防いだまでだ
北上川を血で染めた流れは
死者の家族や親族や先祖の流れぞ
お前達はそれを汚した
恥を知れ恥をしれ日本と同じではないか

神よなぜ平穏な慎ましい生活の郷が
許されないのですか
醜い争いの大地になさるのですか
阿弓流為が北上川で流した涙が
いまも聞こえてくるのですよ
ヒューヒューという風の中にね

蝦夷の大酋長で大墓公(たものこう)
アテルイ(阿弓流為)のこと。
延暦八年三月、手勢二千人で
大和朝廷軍五万二千人を北上川で破る。
多分、日本歴史では抹殺しています。

『阿弓流為 二』(02/22)

北上川に立つと
ゴーゴーと風は空を走り
ヒューヒューと風は原野に響き渡り
遠い昔のはるか遠き列島時代に
阿弓流為が流した涙の音が
混じり聞こえてくるのです
人はどうして争うのか
人はどうして平和に暮らせないのか
富など求めず
家族の平穏な日々の生活郷を
神はどうしても許されないのか

さめざめと流す涙の音色が
ゴーゴーと在れ吹く風に
ヒューヒューと吹き荒ぶ風に
かすかに聞こえてくるのです

大地の尽きるまで日本国のものとせよ
天皇の御世に幸在れ栄え在れ
坂東の安危この一戦にあり
ひたすら富を求める一団の息吹
建国に燃える集団の息吹が大きく
私の両耳を塞いでくるのです
今はもうこの列島はその真っ只中
列島の民人コロニーの古代は否定され
日本国の古代国家創世が教育となり
勝つまでは欲しがりませんと
戦を仕掛けたり
会社へ忠誠心を捧げ家族の絆も切る
社会を作ったり
神代の国が建国日となり
不夜城の栄華をひたすら追い求める
一億の民人が倭(日本)社会

『ここにも』(03/17)

ここにもまた
企業戦士がいる
一途に
会社の為に働く
新兵が誕生する
己の人生を
会社の為に捧げる

企業戦士が
桜の花びらとともに
誕生する

ああ 私には
真似も出来ない
彼らの人生ページである
生きのページである
私には出来ない
生きのページを
彼ら戦士の人生を
いく年月を見る
ここにも また
企業戦士がいる

『北風 (04/06)』

今日も空の中を
ゴーゴーと
北風が吹き荒れています
もう春の香りなのに
もう春の息吹が芽生えているのに
北風がゴーゴーと
荒れ吹いています

まるで 心に染み付いた用心深さを
吹き飛ばすように
まるで一枚一枚と重みを剥がすように
たぶん 心が緩んだら
たぶん一枚一枚よろいを脱いだら
北風は去って行くのでしょう

『ねむり (04/07)』

このまま眠り続けたい
目覚めれば痛むのだから
ずっと眠りの中にいたい
目覚めれば痛みの中に
生きなければならないから
永久の眠りが出来ないのなら
せめて眠りの中にいたい

このまま眠り続けられたら
どんなに幸せであろうか
眠りのまま目を開けることが
なかったらどんなに安らかであろう
生きの地獄を知らずに
生きてゆけるのならば

そんなことは不可能な事だ

できることは眠る事
必ずくるのは目覚めの事
生きるのは 地獄の中
生き続けるのは 鬼になること
人の血を吸って
生きよとは　言えないが
人もまた動物の一員である

『星の灯火 (07/24)』

星を見ていると
何もかも忘れる

渋谷の不夜城から
上空を見上げると何も無い躯
地上には人々の定まりの無い
笑い笑い声声の響き

ここには星がないことを知る
明日をなくした人々の集まり
夢を描いて今日を生きる人々
いつ果てるともわからほど
不夜城に繰り広げられる骸な
人々の息と波

ここから何人の人が
明日を掴み星を見るため
空虚な不夜城砂漠から抜け出すのか
いった何人の人か

暗闇の道へ歩き出し
星の灯火に気がつくのは

『あめ (09/28)』

雨が降ります
雨が降る
私の心に なみだ降る
遠い昔の幼日が
今に湧いて 泣いている

雨が降ります
雨が降る
私の心に なみだ降る
遠い昔の 帰らぬ日々に
今になって 泣いている

雨が降ります
雨が降る
私の心に なみだ降る
帰らぬ 思いに
泣いている 泣いている

『川 (09/28)』

流れ 現れ
流れ 去る
川辺に 佇み
水音の響き聴く

現れいずる 来し方の
現れ去りる 岸方を
見つめて 水面(みな)の

騒ぎ 響き声

沢の樹木の枝揺らし
飛び交う小鳥の胸揺らし
ちょろちょろちょろと
水の面の 囁きを

『ねむり二 (10/03)』

ひとつ眠って 夢の中
見果てぬ花の 咲き乱れ
笑顔で歩く 夢世界

ふたつ眠って 見る夢は
小鳥も木々も 優しくて
心に想った 夢世界

みっつ眠って 見る夢は
帰らぬ日々の 面影が
灯火に映る 夢世界

よっつ眠って夢の中
うつ世の痛みも微笑みて
寝息の心を夢世界

End all 2002